

懺悔しました

こもだ 一郎

近所に同級生の友達がいる。

大工のY君だ。十軒ほど先にある彼の家までは自転車で一分もかからない。Y君が自身で造ったという家は、リビングがかなり広くとってあり、その端っこにカウンター式の台所がある。そのカウンター横に四人掛けのテーブルがあり、彼はひとりそのテーブルに座り、「のどごし」を飲みながらテレビを観ている。

彼は独身である。他に家族はいない。母親は健在だが、近くの町営住宅で暮らしている。妹は岡山県、弟は同じ敷地にある別宅にこれまた一人で住んでいる。父親は彼が三十六歳の頃に亡くなったそうだ。

時々彼の家を訪ね、「おーい居るや」と声をかけると、ビール片手に「おーい」と言う返事は返って来るが、決して立ち上がろうとはしない。それは、顔見知りの同級生だからか我々を玄関に出迎えることはない。

そして、次の言葉が「冷蔵庫にビールがあるから勝手に飲みない」である。自分たちも「勝手知ったる……」でキッチンの冷蔵庫からビールを取り出しY君の前に座るのだ。もちろん、いつもが手ぶらではない、ときには何某かの酒と肴を抱え彼の家に押し掛ける。

Y君は、以前東京でマンション建設の仕事をしていた。ところが、三年前のある日のこと、彼はしこたま酔っ払い、アパートの階段から転げ落ち大怪我をした。後頭部を何針も縫い、ひざを骨折してしまった。それから数カ月がたち頭の傷は治ったものの、ひざはなかなか回復しなかった。そして、とうとう会社をやめ郷里の宮崎に帰って来た。

彼が帰郷すると、間もなく彼の自宅はみんなのたまり場となってしまった。そして、ひよんなことから、そこに出入りしていた同級生のK女とくっ付いてしまった。隣のホームセンターに勤めているK女だ。彼女も独身である。彼女には二十歳になるひとり娘がい

懺悔しました

るが、去年の秋にめでたく結婚した。

そして、K女もこれまたビール大好きの「のんべえ」である。みんなが集まると、Y君に「おまえたちあーいっしょになれ」などと冷やかしていたが、一向にその気配はなかった。ところが、去年の春ごろから時々Y君の家の庭にK女のワゴンRを見かけるようになった。ちょっと変には思ったが、それまで彼の家には事あるごとにみんなが集まっていたのでことさら気にも留めなかった。

それからしばらくして、K女はどうとうY君の家に転がり込んでしまったのである。

さて、これからある事件が起こった。

去年の十二月六日のことである。もしこの日が一日ずれ、十二月五日か、十二月七日だったら、いつもと変わらない日常が過ぎてゆくはずであったが……。

師走、現場の方もいよいよ佳境を迎え、土日返上で仕事に追われていた。十二月六日、仕事帰りの夕刻六時頃だった。プルルルーン携帯が鳴った。

「しゅんぼ今日よ、K女の誕生会をするらしい、聞いちゃった」D君からだった。

「うんにゃ、聞いてないけど、何時から？ Yの家じゃろ、分かった行くわ」

電話はそれで切れた。

自宅まであと十分ほどだった。「へー今日はK女の誕生日か、なんか買うて行かんとな』などと考えているうちに家に着いた。

玄関を開け、「ただいま」と言うと、茶の間から「お帰りなさい」と妻の声がした。荷物を台所に置き茶の間の前まで行くと、妻は洗濯物を畳みながらテレビを見ていた。

その背中越しに「今日、Kちゃんの誕生会をするらしい、今から行って来るわ」と言うと、変は「ふーん」と言っただけか気のない返事だった。まあいいかと思いつつ風呂場に行った。

風呂場の狭い脱衣場で、服を脱ぎ捨て湯船に浸かった。

K女と妻は顔見知りだし、夕食のときなどK女やY君のこともたびたび話題になっていた

た。

「別にやきもちを焼くことでもないのになー……」妻のそっけない返事が少し気になっていた。

熱めのお湯に肩まで浸かり、フーとため息を付くと、今度は仕事のことが頭によぎった。現場はどこも忙しそうだった。次の班長会議には一応増員を頼んでみようかそれでもだめだったら、土日返上でやるしかないか。一日を振り返るとやはり、現場の事ばかり浮かんでくる。

いつぞや、釣りやゴルフに興じている私に、〃あんた必殺遊び人やね〃と妻から揶揄されたことがあった。世間の心配ごとを一身に背負っているような性格の妻は三人の子育てに奮闘し、からっと晴れ上がった日曜日に布団を干しそのお日様の匂いを嗅いでしあわせを感じるような女である。世間のご婦人たちのように温泉旅行にも行きたがらない。指輪やハンドバックを欲しがるわけでもないし、千円のサンダルさえ買うのも〃これ買っていい〃私の許可をもとめるのである。〃そんなもん勝手に買え！〃と呆れて怒ったことがあったが、その時妻は嬉しそうに〃いいのがあったんよ〃言っていてニコニコしていた。

釣りやゴルフくらいで、〃必殺遊び人〃とは大げさじゃないかと思っただが、家事や子育てに追われている妻からしてみれば、私が妬ましく思えたのであろう。

湯気で真っ白になった壁をぼんやりながめて、また、フーとため息を付いた。

「十二月六日かー、今日はKちゃんの……」と思っただ次の瞬間、愕然とした。「やっちゃった」

やばい、何を隠そう、今日十二月六日は今、茶の間で淡々と洗濯物を畳んでいる妻の誕生日だったのだ。

「道理でさっきの返事がなんか変だったよな」

ごめん女房殿、あなたの誕生日を忘れていました。

おそらく、昨日あたりから明日は、〃おめでとう〃のひとつくらいはあるだろうと思っただけである。

それが、なんと言うことか自分の誕生日に、夫から帰って来るなり開口一番「友達のしかも女の子の誕生会に行つて来る」と言われたんだよね。

それから、ろくろく体も洗わず、そそくさと風呂から上がった。着替えを済ませ、茶の間にいくと妻はまだ黙々と洗濯物を畳んでいた。

ただただ謝るしかなかった、「ごめん忘れとった。仕事が忙しかったもんやから……」と苦しい言い訳をした。

「ううん、いいのよ。行って来ない」と背中を向けたまま妻は静かに言った。いつもだと、「あんまり遅くならんようにね」と釘を刺されるのであるが、それもなかった。非難されなかったのが返って辛かった。

しかたなく「うん行って来るわ」と言っただけで玄関を出た。

Y君の家では、すでに何人が集まっており「ワイワイガヤガヤ」と盛り上がっていた。しばらくして、さっきの事の顛末をみんなに話した。

実は、今日は慶子の誕生日でそれを忘れて「Kちゃんの誕生会に行つて来る」と言ったことや、そしたら、嫁さんが機嫌悪そうにしていたことも話した。

みんなからは非難轟々だった。ある者は「今からすぐ帰れ!」と言われた。

「仕事がせわしくて、つい忘れてたんよー」と必死に弁解したが、誰一人弁護してくれぬ者はいなかった。それどころか男どもは格好の酒の肴にして楽しんだ。

「俊ちゃん、あんた絶対悪いわ、奥さんに謝ってなんか買ってやんない」と看護師のSは真剣に言った。

やがて、K女の誕生会は十時頃お開きになり、みんな三々五々帰って行った。何人かは女子たちに送ってもらい、近くの者は歩いて帰った。私もほろ酔いかげんでテクテク歩いて帰った。

茶の間にはまだ灯りが点いていたが、妻はすでに寝ているようであった。しばらくこたつに入って、スポーツニュースを眺め寝室に入った。

そして、隣の寝室で寝ている妻に手を合わせ「懺悔」した。「ごめん、みんなにも怒られたよ」

それから一週間後、私は、デパートの女性用下着売場に行く羽目になってしまった。罪

滅ぼしに、妻の誕生日プレゼントを買いに来たのだ。

ここ何日か色々と思案したが適当な物が思い付かなかった。それで看護師のSに相談したら「キャミソールなんかいいんじゃない」と言われた。

「えっ、それって下着じゃねーか」、男がウロウロする所ではないのに……。

仕方なかった。そしてこの日、意を決して下着売場の店員さんに声をかけたのである。「すみませーん、キャミソールってどこありますか」

翌日、きれいに包装された色違いの二枚のキャミソールは、次男に渡してもらった。「これは、おまえと俺とお兄ちゃんのプレゼントと言うことにしとくからな」と言った。事情を知らない次男は、始め怪訝そうな顔をしていたが、何も聞かず分かったと言って引き受けてくれた。

その日、妻は台所の洗い物が終わり、茶の間に入って来て私に言った。「プレゼントありがとう、でも、あれ私にはサイズがちっちゃくて入らんよね、交換してきて」「えっ、また下着売場をウロウロせにゃいかんとかー」

この頃には妻はすっかり元気になり、元のちよっぴり図々しいおばさんに戻っていた。

一九九五 初夏